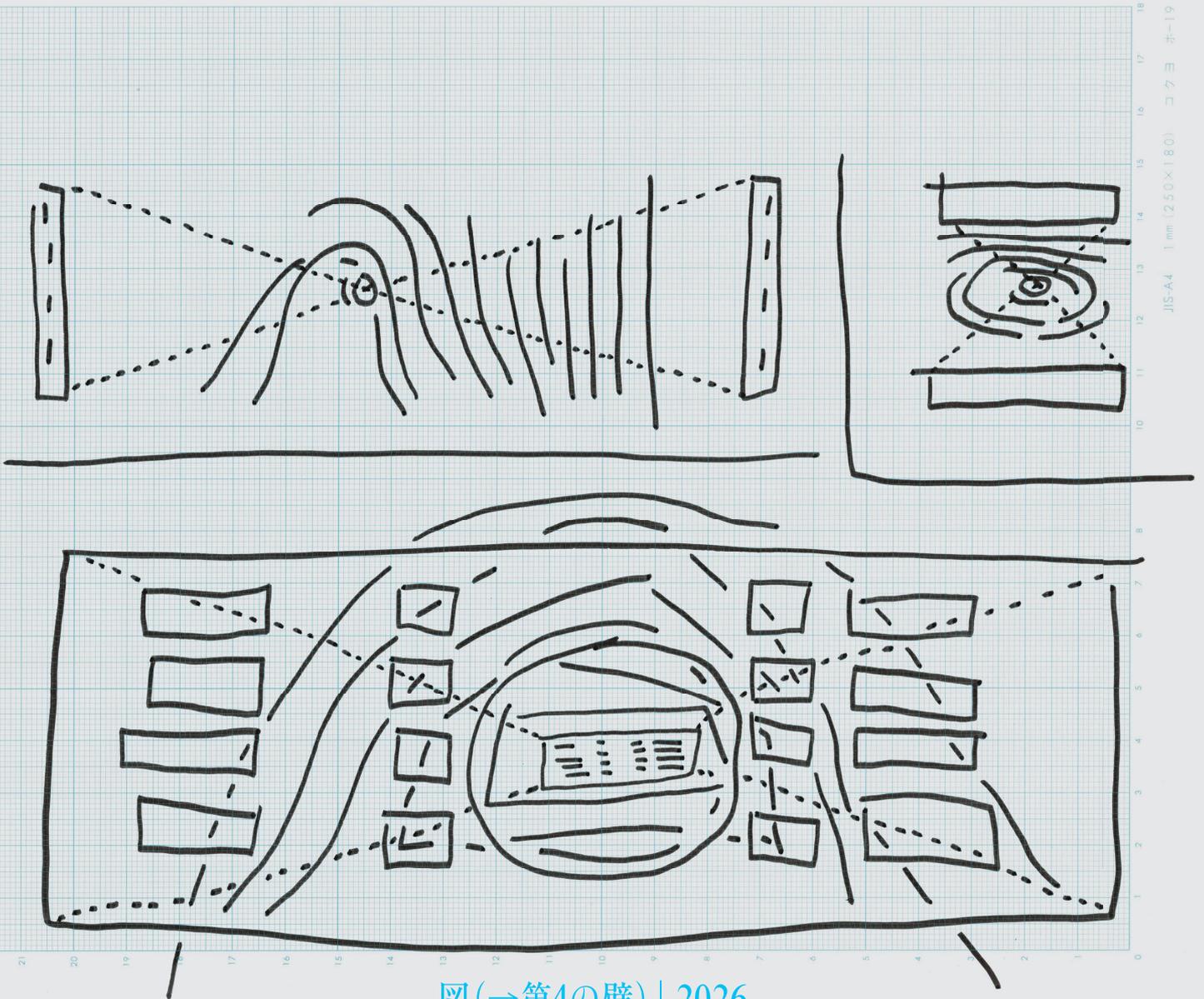


→ 第4の壁

2026年5月2日(土)——6月28日(日)



図(→第4の壁) | 2026

午前10時——午後6時

火曜日休館

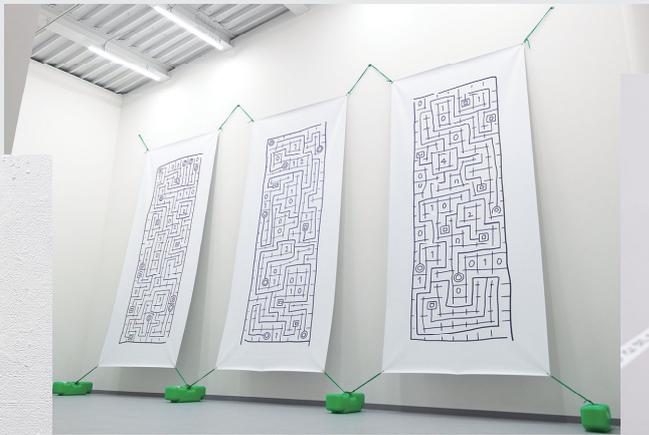
※ただし5月5日(火)は開館し、5月7日(木)は休館
入場無料

→ 第4の壁

第3回白髪一雄現代美術賞を受賞した土屋咲瑛による展覧会「→第4の壁」を開催します。土屋は「日常で出会うある種の没頭のなかで、自らの存在感が薄くなる瞬間」をテーマに、地図、編み物、ドローイングなど様々な手法で作品を制作してきました。身近な例では、美しい風景に目を奪われたり、物語の世界に入り込んだりしている時などが、それに近い状態と言えるでしょうか。没頭しながらふと我に返ると、私たちはまるで舞台の外から別の自分を眺めるような不思議な感覚に襲われます。展覧会のタイトル「→第4の壁」は、俳優のいる舞台と現実の客席を隔てる「見えない」境界を表す演劇用語に着想を得たものです。新作、近作を織り交ぜた展示空間の中で、作品の向こう側にいる作者と私たち鑑賞者は、それぞれどのような「私」のあり方を感じ取ることができるのでしょうか。不可思議でユーモアに満ちた、新進気鋭のアーティストの個展をぜひお楽しみください。



バル | 2022



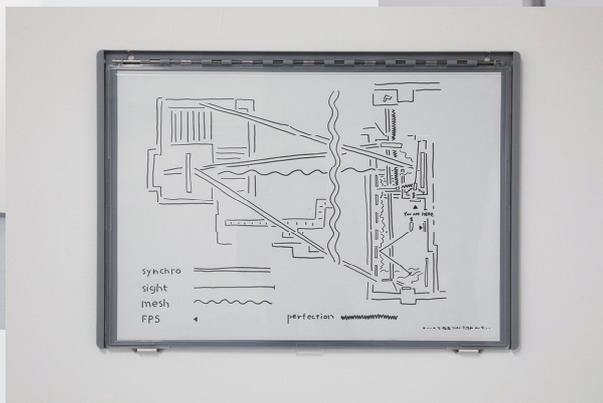
「ルームフルオブルールズ (スルー・ユー)」展示写真 | 2024



そら音「あたま山」(脳内醸成) | 2024



「ルームフルオブルールズ (スルー・ユー)」展示写真 | 2024



地図 (メッシュウェアブーゲイズと周辺) | 2024 | 撮影 小林哲明

自画像を描くことに、ずっと違和感がありました。自分からは見えていない自分の顔を描いて自分を示すというのは、私にとってどこか自然でないかのように思えました。

演劇用語に「第4の壁」というものがあります。舞台と観客席の間を隔てる架空の壁を指す言葉で、現在は演劇に限らず、例えば作品と鑑賞者との間にある画面や紙面を指すこともあります。あらゆる私は作品の前で、透明な第4の壁の前で、ただでさえ私から見えていない自分なのに、改めて透明を演じます。絵を描く私、見る私、物語を読む内言、地図の手前、目の裏、そういった、第4の壁の向こう側に居ないことになっている「私」を描くことで、私たちのことを指差したいです。

土屋咲瑛 (出展作家)

イベント トークイベント

5月16日 (土) 14:00—15:30

篠原雅武氏 (京都大学大学院総合生存学館 (思修館) 特定准教授) をゲストに迎え、出展作家とニュータウン—制作の原風景について話します。

会場 | A-LAB 定員 | 20名 申込方法 | イベント名、氏名、電話番号、人数を明記の上、amalove.a.lab@gmail.comまでお送り下さい。

作品解説会

6月7日 (日) 14:00—15:30

出展作家による解説を聞きながら作品を鑑賞します。

出展作家 土屋咲瑛 Tsuchiya Sae



撮影 佐藤真優

自分からは見えない自分自身について、目の前にあるものを通じて捉えることをテーマに、主にドローイング、既製品、編み物、アニメーションなどを使用したインスタレーションの形式で、制作を行う。地図やパズル、建物など、一見かつちりしているが、人が使うものであるがゆえにどこか歪みが生じるモチーフを使用することが多い。

1999年大阪府生まれ。2024年京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻油画修了。主な展覧会に、個展「パースのない事務は透明なこちらをずっと向いている」(茨木市立ギャラリー／みるぼ／Socio)／茨木市役所本館北側外壁、大阪、2026)、個展「不可分な自分の領分→ぐるぐる→」(ARTRO、京都、2024)、「アートアワードトーキョー丸の内2024」(行幸地下ギャラリー、東京)、「A-LAB Artist Gate'24」(A-LAB、兵庫)など。2021年「シェル美術賞展2021」入選、2024年「Kyoto Art for Tomorrow 2025 —京都府新鋭選抜展—」ゲーテ・インスティテュート・ヴァル鴨川国際交流賞、2025年「ARTISTS' FAIR KYOTO 2025 マイナビ ART AWARD」優秀賞、2025年「第3回白髪一雄現代美術賞」受賞。

